

第十二回 齋藤茂吉短歌文学賞

森岡貞香 『夏至』

砂子屋書房

選考委員

委員長 馬場あき子

委員 岡野弘彦

佐佐木幸綱

高橋睦郎

本林勝夫

(五十音順)

森岡貞香『夏至』

(自選十首)

待ちて居りしと人に言ひたるわがこゑをわれみづからも聞きてありたり

そら走り水鳥行きぬ逝く春に忌を重ねつつなに嗟くにか

いろ湛ふる淵に沈むやうよそゆきの着物のなかに入りぬうつしみ

飽きもせずうからら膾の菊を食ぶ もつてのほかの淡きむらさき

死後といへど歩行なしつつあるらんと秋あかるきにわれ出でてをり

ふくふくとましろき芒の太き尾をかいなでやりしが枯れ伏すらむか

ひと來たり冬服着こみたるにも雪ふりみだるる彼の日は過ぎし

あさかげに出でゆく人にいひしかばいつていらつしやいはかなしき言葉

まどろみに入りこし人のみるみるにらんとなりぬわが椅子のまへ

あはあはとさし入るゆふかげ枝と枝との間のひらかれてあり

● 選考委員による選評

知的な感性の魅力

馬場あき子

森岡貞香氏は昭和二十八年に『白蛾』で登場して以来、対象への客観的な距離を保った視点から、特異独特の感性をみせた表現の魅力が注目されてきた。今回の受賞作品『夏至』には、年齢を超えた感覚のおもしろさがある。「ふくふくとましろき芒の大き尾をかいなでやりしが枯れ伏すらむか」では、植物を生物のように捉えたなかに労りのやさしさがこもり、「老いにたる月桂樹の木よらうれるの香ひ葉摘みて暑氣をば被ふ」のような歌には、老樹を通いあう境涯の心をはじめながら表現はむしろ若々しくみずやかだ。そこに自ずから、詩とは何かを探索しつつ歩んできた作歌の道程のはるかな遠さが感じられ、知的なおもしろさが躍如としている。

新鮮で活力のある歌集

岡野弘彦

森岡貞香さんは、短歌表現の上に常に清新なひらめきと、魅力ある構成とを追求しつづけて止まない作家です。守るべき伝統は守りながら、狭い伝統主義にとらわれることなく、歌の新境地を目ざして、倦むことのない貴重な女流歌人です。そのことは最近に刊行された『定本森岡貞香歌集』にも明らかであり、さらに新刊の歌集『夏至』にもよく示されています。

この歌集は、齋藤茂吉にちなんだ短歌文学賞にふさわしい、長い修練の成果と活力ある未来性を持った歌集であると考えます。

個性のきわやかさ

佐佐木幸綱

第十二回「齋藤茂吉短歌文学賞」が、森岡貞香さんの『夏至』に決まったことを大いに喜ぶ一人である。

歌のリズム、意味、イメージ、どれをとっても、この歌集の個性はきわやかである。さらに、古典和歌の摂取のしかた、つまり伝統の継承のしかたもきわめて個性的だ。

びにーるの袋とも水母とも見えながらしろき微光はみづと連れだつ

この一首を読んで、あつと思つた。定家の〈見たせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮〉を踏まえた作らしい。じつにユニークである。

陰翳と光輝

高橋睦郎

旧世紀最後の年の終わりから新世紀最初の年の始めにかけて、志高く辞正しい歌集が輩出して、私を驚かせ悦ばせたが、森岡貞香歌集『夏至』はその中の白眉の一冊だった。日常のありふれた一瞬がじつは怖ろしい貌を持つていることを、可能な限り押さえた目立たない表現によって際立たせるといふこの作者の一貫した方法が、加齢とともに陰翳と光輝を深めて来たことに、改めて敬意を表したい。歌の将来を荷なう若い人人がこの瑞瑞しい井から多くを汲んでもらいたい、とも思つた。

悲をば入れこみし 本林勝夫

最上川の大き流れと向きあひて悲をば
入れこみしか老いにし歌人

世評の高かった前歌集『百乳文』にさりげない形でこういう一首があった。森岡短歌としては目立つ作ではないが「悲をば入れこみし」という表現は独特であり、同時に実に多くのことを語っている。戦後の苦境から出発した森岡さんの歌は時に難解の評を受けながらも屈指した詠み口を徹底し、徹底することによって独自の詠風を切り拓いた。今度の『夏至』は『百乳文』に続くものだが、その知的作風はますます自在となり、まぎれもない円熟の姿を見せている。一見淡泊な日常詠の形をとっているが、その心理の變ふかく切り込んだ作風は現代短歌に類を見ない風体を確立したものと思う。

第12回齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

森岡 貞香（もりおか さだか）

歌人。大正5年3月4日高根県松江市生まれ。昭和7年「竹柏会」に入会。9年より31年まで「ポトナム短歌会」に所属。24年女流総合誌「女人短歌」創刊に参加。31年現代歌人協会創立発起人。同人誌「灰皿」「律」を経て、43年「石疊」を創刊し主宰する。平成9年、女人短歌代表として同会解散、終刊資料本を刊行。「朝日新聞」茨城版・神奈川版、「日刊工業新聞」、「北国新聞」等歌壇選者。昭和55年より朝日カルチャーにて短歌講座を持つ。61年より「短歌現代」歌人賞選考委員。平成元年より3年までNHKテレビ短歌講座担当。5年から6年まで齋藤茂吉短歌文学賞選考委員。現代歌人協会理事。

歌集

『白蛾』（昭和28年）、『未知』（昭和31年）、
『鏗』（昭和39年）、『珊瑚數珠』（昭和52年）、
『黛樹』（昭和62年）、『百乳文』（平成3年）、
『夏至』（平成12年）

受賞歴

昭和28年 短歌雑誌連盟歌集賞 『白蛾』
平成4年 第26回逍空賞 『百乳文』
平成12年 現代短歌大賞 『定本 森岡貞香歌集』



受賞の言葉 森岡貞香

歌集『夏至』が第十二回齋藤茂吉短歌文学賞を頂きました。日日の常に嬉しいことになりました。日日の常に身近く置いて離さぬ歌集は齋藤茂吉の歌集ですから、その名を冠した文学賞を受けるのは格別な思いがあります。長い年月を短歌にかかわってききましたが、この先きわたくしにどれほどの短歌が詠めるかわかりませんが氣持を新たにしましたことです。

短歌という形式のもつ美しさは、たとえば、

「小園のをだまきのはな野のうへの
白頭翁の花ともにほひて」という歌集『小園』の中の一詩、これほどの歌は他にないでしょう。

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房
第二回 本林勝夫 『斎藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社
第三回 塚本邦雄 『黄金律』 花曜社
第四回 前登志夫 『鳥獸蟲魚』 小澤書店
第五回 斎藤 史 『秋天瑠璃』 不織書院
第六回 近藤芳美 『希求』 砂子屋書房
第七回 小暮政次 『暫紅新集』 短歌新聞社
第八回 馬場あき子 『飛種』 短歌研究社
第九回 吉田 漱 『「白き山」全注釈』 短歌新聞社
第十回 佐佐木幸綱 『呑牛』 本阿弥書店
第十一回 伊藤 博 『萬葉集釋注』 集英社

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇―八五七〇

山形市松波二丁目八―一 山形県文化環境部文化振興課内
TEL・〇二三―六三〇―二二九一